

アニメで知る心の世界

こもれば心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：空の青さを知る人よ

あらすじ

山に囲まれた町に住む 17 歳の高校生・相生あおい（あおい）は、音楽に情熱を注ぎながらも将来への明確な道筋を見出せずにいる。13 年前に両親を事故で亡くし、姉のあかねに育てられた彼女は、あかねへの感謝と負い目、そして自分の夢への憧憬の間で揺れ動いている。

あかねは当時高校 3 年生で、恋人の金室慎之介との上京を諦め、あおいの親代わりとなって地元で就職した。それから 13 年、あかねは地域に根差した生活を送り、あおいを支え続けてきた。

ある日、町の音楽祭に慎之介がバックミュージシャンとして帰郷する。同時に、あおいの前に 13 年前の若き日の慎之介「しんの」が現れる。過去と現在が交錯する中で、あおいとあかねの姉妹関係、そして二人の慎之介を巡る複雑な感情が描かれる。

物語は「井の中の蛙大海を知らず。されど空の青さを知る」という言葉を軸に、それぞれが自分の「井戸」の中で見つけた「空の青さ」と向き合い、新たな一歩を踏み出していく成長の物語である。

今回のテーマ

きょうだいトラウマとエディプスコンプレックス

はじめに

ジュリエット・ミッチェルの「きょうだいトラウマ」理論は、きょうだい関係における独特な心理的葛藤を説明する重要な概念である。きょうだいは「同等でありながら違う存在」であり、この微妙な関係性が様々な心理的課題を生み出す。

「空の青さを知る人よ」は、両親の突然の死という喪失体験を経て、年の離れた姉妹であるあおいとあかねの関係が、本来の姉妹関係から親子関係（保護者と被保護者）へと変容していく物語である。この過程で生じた姉妹間の情緒的葛藤は抑圧されたまま、あおいは成長を続ける。

高校 3 年生となり成人への移行期を迎えたあおいの中で、長年抑圧されてきた情緒的葛藤が再浮上する。この変化の過程で生じる心理的葛藤、特にあおいの内面に芽生えるあかねへの競争心、劣等感、そして罪悪感は、まさにきょうだいトラウマの典型的な症状として理解することができる。そこにあかねの元恋人である慎之介が帰郷し、今まで置き去りにしてきた様々な感情と向き合うことになる。

本作品を通して、きょうだい関係の複雑さと、そこに生じる喪失からの離脱・再建の過程について考察していきたい。

今回のテーマ

I. きょうだいトラウマの理論

II. あおいの発達過程における退行と再挑戦

III. 「しんの」の象徴的意味とエディプスコンプレックス

IV. 慎之介の喪失と都市での挫折

V. 三者それぞれの「再生」の物語

VI. まとめと「井の中の蛙」の多層的解釈

I. きょうだいトラウマの理論的背景

1) ジュリエット・ミッチェルの「きょうだいトラウマ」

ミッチェルによれば、きょうだいトラウマは以下の特徴を持つ：

- 同等性と差異の矛盾：ミッチェルによれば、きょうだいトラウマは独特な心理的構造を持っている。まず、きょうだいは「同じ家族の一員」でありながら「異なる個体」であるという、同等性と差異の矛盾を内包した存在である。この矛盾が、きょうだい関係における根本的な不安定さを生み出している。
- 排除される恐怖：きょうだいトラウマの中核には、心理的に「消去される」「愛情を失う」という排除される恐怖が存在する。これは物理的な

死への恐怖ではなく、関係性の中で自分の存在価値が否定され、親や重要な他者からの愛情を失うことへの深い不安である。

- **競争と愛情の葛藤**：きょうだい関係では愛する対象との競争という矛盾した感情が生じる。親や家族への愛情を共有しながらも、同時にその愛情を巡って競争しなければならないという、相反する感情の共存がきょうだいトラウマの特徴的な側面となっている。

2) あおいとあかねの関係性の変遷

相生あおい：本作品の主人公で、あかねの妹。ボブカットに太い眉が特徴的で、慎之介と同様に左目の白目にほくろがある。学校での交友関係はほとんどなく、マイペースに放課後は一人でベースの練習に明け暮れる日々を送っている。確固とした将来像は持っておらず、漠然と東京に出てバンドで天下を取ることを夢見ている。

この夢の背景には、秩父での生活の息苦しさから逃れたいという思いと、上京すれば成功できるという万能空想が存在している。現在、姉の庇護を受けながら成長する中で様々な内面的葛藤が噴出し始めているが、その葛藤と直面することを避け、理想郷としての東京を求めているように感じられる。この心境は、劇中で重要な意味を持つ楽曲「ガンダーラ」の歌詞が表現する「どこかにあるユートピア」への憧憬と通じるものがある。

相生あかね：あおいの姉で、慎之介の元恋人。通勤に使う自家用車であおいを日頃送迎している。勤務先は市役所の市民生活課で、あおいからは「あか姉（ねえ）」と呼ばれている。

両親が交通事故で亡くなったことを受け、金室慎之介（しんの）と一緒に東京に出るという約束を断念し、地元の市役所に就職してあおいを育てる傍ら独身を貫いている。気立てが良く、地域住民との交流も積極的に行い、周囲からの評判も良い。しかし、そうした完璧とも言える人格や生き方が、高校生に成長したあおいの心理的葛藤を助長させる要因ともな

っている。

幼児期（両親の事故前）：

あおいはあかね常に一緒に行動をしていたが、一方であかねに対して自然な対抗心や羨望を抱いていたように感じられる。→幼少時に慎之介たちのバンドの練習を見てベースに興味を抱き、慎之介からは「でっかくなったら、うちのベースな」と言われ、ベースの指導を慎之介から受けていた。慎之介と同じバンドで演奏すること、それは姉には届かない場所で、自分はバンドメンバーになれるという幻想を抱いたと考えられる。つまり幼くもそこにはあかね・慎之介・あおいのエディプスの三角関係が存在していたように感じられる。

両親の死後：

両親を失った幼いあおいにとって、この時期は生存と安全確保が最優先となり、心理的発達において、より安全で単純な段階へと一時的に戻ることで、圧倒的な喪失体験に対処しようとしたと考えられる。

この過程であおいは、あかねとの母子的二者関係になることを選択した。本来の姉妹関係から、母親と子どものような保護者と被保護者の関係へと変化することで、失われた安全感を取り戻そうとした。この関係性の変化は、幼いあおいの心理的安定にとって必要不可欠であったと考えられる。

しかし、この適応的退行は同時に、エディプス葛藤の抑圧と「しんの」（若き日の慎之介）の排除をもたらした。実際に、しのがあかねと一緒に東京に行こうと提案した際、あかねがそれを断ると、あおいは「あか姉つれていくな！」と強く反発した。この反応は、あおいが無意識のうちに三角関係を拒絶し、あかねとの安全な二者関係を維持しようとする心理的防衛の現れであった。結果として慎之介への憧れは、あおいの心の奥深くに抑圧されることとなったと考えられる。

現在（移行期）：

当時のあかねと同じ年になるにつれ、あおいはこれまで抑圧してきたエディプス葛藤が再燃し、秩父での生活に息苦しさをを感じるようになったと考えられる。高校 2 年生という人生の岐路を迎える進路決定を始める時期に、あおいはあかねに対する様々な情緒的葛藤が噴出してくることとなる。

これまで「保護される側」として安全な立場にいたあおいは、今度は「同じ大人の女性」

としてあかねと比較される状況に置かれることで、長年抑圧していた競争心と劣等感が再浮上してくる。あかねは愛嬌があり、積極的に地域の活動に関わり一地域に愛され、自制心があり、周囲との調和を保つ能力―と自分を比較することで、あおいは自分の未熟さや社交性の低さを痛感し、深い劣等感に苛まれるようになったと考えられる。

しかしあおいは、この葛藤を否認するように進路指導では進学を希望せず、刹那的に「今いる場所から逃げ出そう」と上京してバンドをしようと考えている。この行動の背景には、劣等感の裏返しとしての躁的防衛の心性が存在している。現実的な自己評価と向き合うことを回避し、東京という理想化された場所で「天下を取る」という万能空想にすぎること、内面の葛藤から目を逸らそうとしていると考えられる。

3) 「殺される恐怖」の現れ

あおいが感じる「あかねと比較して自分が劣っている」「あかねの方が優秀で愛される存在」という認識は、心理的な「排除される恐怖」として現れている。これは物理的な死への恐怖ではなく、関係性の中で自分が無価値になり、愛情や承認を失う恐怖である。

この恐怖の根源は、両親を失った直後の体験にまで遡ることができる。当時幼かったあおいにとって、あかねは文字通り生存を支える唯一の存在であった。もしあかねに見捨てられれば、再び絶対的な孤独と喪失に直面することになる。この根深い不安が、あおいの無意識に刻み込まれているのである。

現在、高校2年生となったあおいは、これまでの「保護される妹」から「対等な大人の女性」へと立場が変化する中で、この古い恐怖が再活性化されている。あかねの完璧さ―地域での人望、自制心、責任感―と自分の未熟さを比較することで、「自分はあかねに劣る存在であり、やがて愛情を失うのではないか」という不安が頭をもたげてくる。

さらに、あおいは自分がいることであかねの人生設計を狂わせたしまったという負い目を抱えており、この罪悪感が排除される恐怖を一層深刻なものにしている。愛されるべき存在でありながら、同時に相手の人生を制約する存在でもあるという矛盾した自己認識が、あおいの心を複雑に苦しめていると考えられる。

Ⅱ. あおいの発達過程における退行と再挑戦

1) 適応的退行の意味

高校卒業直後のお堂の前であかねとしんのが話し合っていたところに、幼いあおいが割って入っていったシーンを取り上げたい。

あかね：私はいけない

しんの：なんで……

しんのは大事な人から裏切られたような痛々しい悲しい顔をしている。

しんの：どうしてだよ！？ 約束しただろ、一緒に東京の専門学校にいくって！

しんのはあかねの両肩を掴む

しんの：なあ、約束しただろ？……あかね！！

あかねはうつむき肩を震わせている。そんな二人の姿をあおいは大きな木の陰からそっと見ていたが、突然二人のところに走り寄り、あおいはしんのに殴りかかる。

あおい：あか姉いじめんな！！ バカァ！！ あか姉つれていくな！！ バカァ！！ デブ！！

後ろから殴りかかってきたあおいに少し驚いた表情でしんのは言う。

しんの：俺は体脂肪率7パーだぞ！！

あおい：うるさい、バカァ！！猿！！ゴリラ！！あか姉つれていくな！！

あかね：ちょっとあおい

そうあかねは言う、興奮し殴り続けるあおいをしんのから引き離す。

あか姉とあおいは、ぜったい 一緒なんだからあぁっ！！

その後も興奮し続けるあおい。その姿にあかねとしんのも呆然と眺めていた……。

【考察】

両親を失った幼いあおいが、エディプス葛藤に直面する心理的準備ができていなかったことは明らかである。突然の喪失によって心理的な支えを失ったあおいにとって、あかねとの二者関係への退行は生存戦略としての適応であった。複雑な三角関係や競争心といった高次の心理的課題に取り組むよりも、まずは基本的な安全と愛情を確保することが最優先となったのである。それゆえ、このシーンであおいは上記のような言動を行ったと考えられる。

また、この退行は発達的には必要な過程でもあった。十分な安全感を獲得することなしに

は、健全な心理的成長は望めない。あおいは一時的により幼い発達段階に戻ることで、失われた安全基地を再構築し、心理的な土台を固め直そうとしていたのである。

さらに、この二者関係への退行は一時的な問題解決としても機能していた。慎之介を含む複雑な三角関係を回避することで、あおいは当面の心理的安定を維持することができた。エディプス的な競争や葛藤は、より成熟した段階で再び取り組むべき課題として、一時的に棚上げされたのである。このような適応的退行は、圧倒的な喪失体験に対する自然で合理的な防衛機制であったと言える。

2) 抑圧された感情の蓄積

しかし、この退行的解決は同時に様々な心理的代償を伴っていた。まず、慎之介という父親的存在への憧れが抑圧されることとなった。幼いあおいにとって慎之介は理想的な男性像であったが、あかねとの安全な関係を維持するために、この感情は意識から排除される必要があったのである。

また、あかねとの競争心についても否認が働いた。本来であれば自然に生じるであろう姉への対抗意識や嫉妬心は、生存に必要な保護関係を脅かす危険な感情として、あおいの心の奥底に押し込められた。

一方で、あおいはあかねに対して退行的で子供じみた反抗的な態度を取るようになった。直接的な対立は避けながらも、わがままを言ったり、素直でない態度を示すことで、抑圧された感情の一部を表現していたのである。これは、安全な依存関係の中で許される範囲での反抗であり、あおいの心理的バランスの取り方であった。

これらの抑圧された感情は、完全に消失したわけではなく、あおいの音楽への情熱という形で昇華されながらも、内面に蓄積され続けていたと考えられる。音楽という創造的な活動を通じて、言葉にできない複雑な感情を表現し、心理的なバランスを保とうとしていたのである。

3) 高校2年生という転換点

大学進学を控えたあおいは、初めてあかねと「同じ大人の女性」として比較される立場に立つこととなった。この転換期において、あおいの自己認識は複雑で矛盾したものとなっていく。

あおいから見たあかねは、完璧で地域に愛され、常に自制心を保つ理想的な大人の女性である。一方で自分自身については、直情的で人との関わりが苦手な未熟な存在として認識している。さらに、自分がいることであかねの人生設計を壊してしまったという深い負い目も

抱えており、この罪悪感があおいの自己評価をより一層低下させている。

このような自己認識の背景には、複雑な内面の葛藤が存在している。あかねへの深い感謝の気持ちと、同時に芽生える競争心が混在し、あおいの心を混乱させている。また、大人として自立したいという憧れがある一方で、あかねに依存していることの安心感も手放し難く、この相反する感情があおいを苦しめている。

これらの葛藤から逃れるように、あおいは上京への逃避願望を強めている。秩父という閉鎖的な環境から離れ、東京という理想化された場所で新しい自分になりたいという思いは、現実の複雑な感情と向き合うことを避けたいという心理的防衛の現れでもある。

そのような中で町おこしのために来た、大物演歌歌手の新渡戸団吉と共にバックバンドのギターとして金室慎之介が現れ、あおいそしてあかねの抑圧してきた思いが再び持ち上がってくる。

バックバンドの慎之介は、以前のようなキラキラとして生き生きとした青年ではなく、何か物憂げで様々なジレンマを抱えた一人の大人の男性になっていた。そんな現在の慎之介の姿に、あおいとあかねはそれぞれ失望にも似た複雑な感情を抱くのである。それと同時に高校生の姿をした生き霊ともいうべき「しんの」があおいが練習していた御堂に姿をみせるのである。

Ⅲ. 「しんの」の象徴的意味と三角関係の再構築

「しんの」出現のシーン取り扱う

1) 「しんの」の心理学的機能

若き日の慎之介「しんの」の出現は、あおいにとって重要な心理学的意義を持っている。

まず、「しんの」は父親的存在の復活を意味している。彼はあおいが幼い頃に心理的に排除せざるを得なかった憧れの対象であり、長年抑圧されてきた父親への愛情が再び表面化する契機となった。同時に、あおいにとっては自立と成長に向き合う象徴的存在でもある。

精神分析的な三角関係の構造（エディプスコンプレックス）で考えると：

- しんの：父的存在（憧れの対象、競争の対象）
- あかね：母的存在（愛情と保護の源泉、同時に競争相手）
- あおい：子どもの存在（エディプス葛藤を体験する主体）

なぜなら「しんの」は、あおいが長年回避してきたエディプス葛藤の核心部分を体現しており、真の心理的成熟を遂げるために避けて通れない課題そのものだからである。

また、「しんの」はあおいにとって安全な挑戦の場を提供している。現実の大人になった慎之介ではなく、過去から現れた「安全な」存在であるからこそ、あおいは心理的リスクを抑えながら感情を探究することができる。これは、一度は回避したエディプス葛藤への再挑戦の機会を与えてくれるものでもある。

さらに、「しんの」への感情は、あおいが「保護される妹」から「大人の女性として愛する対象を持つ」という新たな発達段階への移行を象徴している。この感情を受け入れ、向き合うことで、あおいはこれまで抑圧してきたあかねへの競争心、嫉妬心、愛情といった複雑な感情（つまりコンプレックス）を認め、より統合された存在へと成長していく。そして重要なのは、「しんの」を媒介とすることで、あかねとの関係を維持しながらこの成長過程を経験できることである。

2) 三角関係の再構築

「しんの」の出現により、一時的に健全な三角関係が復活することとなる。この三角関係の再構築は、それぞれの登場人物に重要な心理的变化をもたらした。

まず、あおいにとって「しんの」への恋心は、単なる過去への憧れではなく、現在の慎之介への思いでもあった。あおいが「しんの」に告白することで、これまで抑圧してきた慎之介への感情を表現し、競争者としての自分を受け入れ始めた。しかし同時に、この告白は逆説的にあかねと慎之介の関係を促進する意味も持っていた。あおいが「しんの」への思いを通じて過去と向き合うことで、現在のあかねと慎之介が共に歩むべき道を明確にしたのである。

あかねにとっても慎之介の帰郷は、これまでの保護者としての立場から、一人の女性としての立場へと移行する契機となった。13年前の思い出と現在の慎之介との再会を通じて、あかねは自分もまた恋愛感情を抱く一人の女性であることを再認識することになる。

「しんの」は、この複雑な関係において成長の触媒としての機能を果たしている。あおいの彼への感情は、過去への決別と現在への受容を同時に促し、三人それぞれが新たな関係性

を築いていく道筋を示したのである。

3) 複雑な思いとの向き合いと「しんの」の緩衝的機能

あおいが「しんの」に惹かれることで生じる複雑な思いは、表面化しにくい微細な心理的葛藤として現れている。

まず、あおいは自分がしんのに恋心を抱くことで、長年自分を支え続けてくれたあかねに対して何となく申し訳ないような、説明しがたい複雑な感情を抱く。これは、あかねの元恋人への淡い憧れを抱くことへの罪悪感に近い後ろめたさのようなものである。

同時に、幼い頃に慎之介を心理的に排除してしまったことへの漠然とした思いも心の奥底に存在している。両親を失った直後、あおいは生存のためにあかねとの二者関係を選択し、慎之介を含む複雑な三角関係から逃避した。その時の選択について、今になって何かもやもやとした感情が湧き上がってくるのである。

さらに、あおいは現在の安全で安定した関係性に変化が生じることへの漠然とした不安も感じている。これまで築き上げてきたあかねとの信頼関係が、自分の新しい感情によって何か微妙に変わってしまうのではないかという、言葉にしがたい心配があるのである。

しかし、だからこそ「しんの」という存在が心理学的に重要な意味を持つのである。もしあおいが現実の慎之介に直接恋心を抱いてしまえば、これらの微細な感情は強烈な葛藤として表面化し、あおいの心を深く苦しめることになったであろう。

「しんの」は、このような直接的な葛藤を回避する巧妙な心理的緩衝装置として機能している。13年前の人物であるため時間的距離による安全性が確保され、「過去への憧れ」という形で新しい感情を安全に体験することが可能となる。あおいにとって「しんの」は、抑圧されていた三角関係の感情を段階的に処理するための心理的な訓練場のような役割を果たしているのである。

この安全な環境で複雑な感情と向き合うことで、あおいは最終的に現実の関係性を再構築する準備を整えていく。「しんの」への感情は、真の心理的成熟に向けた必要不可欠な通過点として位置づけられているのである。

しかし、この罪悪感こそが健全な分離・個体化には不可欠な要素である。

そのようにして帰郷した慎之介、ならびに「しんの」との出会いは、あおいとあかねの抑圧されていた感情を再び掘り起こすことになる。しかし、大人になった慎之介自身もまた様々なジレンマを抱えており、あの時に失ったものへの思いを整理できずにいるように感じられる。

IV. 慎之介の喪失と都市での挫折

1) 理想化された記憶からの乖離

13 年前の慎之介（しんの）：

1) 理想化された記憶からの乖離

13 年前の慎之介（しんの）は、あおいとあかねの記憶の中で理想化された存在として保たれていた。音楽への純粋な情熱を持ち、キラキラと輝く青年として、二人の心の中に刻まれていたのである。特にあおいにとって、彼は憧れの対象であり、自分も同じような道を歩みたいという夢の源泉でもあった。

また、当時の慎之介は無限の可能性を秘めた希望の象徴として機能していた。東京での成功を夢見て旅立っていく彼の姿は、あかねにとっては共に歩むはずだった未来への憧憬を体現する人物であった。あかねもまた、現在のあおいと同様に秩父という限られた環境から脱出し、より広い世界で自分の可能性を試したいと願っていたのではないかと考えられる。しかし、両親の突然の死により、あおいを庇護する役割を果たさざるを得なくなり、その夢は断念せざるを得なくなった（それがあおいの罪悪感に繋がるのだが）。

13 年という歳月が過ぎ、現実の慎之介と再会することで、この理想化された記憶と現実との間に大きな乖離があることが明らかになる。記憶の中の輝かしい青年像と、目の前にいる物憂げで複雑な感情を抱えた大人の男性との間には、埋めがたい溝が存在していたのである。この乖離は、あかねにとっては自分が諦めた夢の現実を突きつけられる瞬間でもあり、あおいとあかねの複雑な感情の源泉となっている。

現在の慎之介の現実

一方、現在の慎之介は、音楽業界での厳しい現実と向き合った結果、深い疲弊を抱えた人物となっていた。かつて抱いていた純粋な音楽への情熱は、生活のための妥協や挫折によって曇らされ、理想と現実のギャップに苦悩する中年男性の姿がそこにはあった。13 年前の輝かしい青年は、物憂げで複雑な感情を抱えた大人へと変貌していたのである。

メジャーデビューの夢は叶わず、現在はバックミュージシャンとして生計を立てる日々。音楽で「天下を取る」という壮大な夢は遠い過去のものとなり、現実的な選択を重ねながら生きてきた彼の姿は、あおいが理想化している「東京で成功する音楽家」像とは程遠いもの

であった。

この13年前と現在の慎之介の対比は、時間の経過による必然的な変化でありながら、あおいとあかねにとっては「理想の喪失」として受け取られることとなった。特にあおいにとって、現在の慎之介の姿は音楽での成功という夢を断念するきっかけであり、同時にエディプスコンプレックスの象徴でもあったのではないだろうか。父親的存在への憧れが現実によって打ち碎かれることで、あおいは幼い頃から抱き続けてきた万能的な空想から目覚め、現実的な選択へと向かうことになる。(実際、エンディングではあおいが大学の合格者発表の前であかねと一緒にピースするシーンが描かれており、現実的な進路選択へと心境が変化したことが示されている。)

2) 帰郷による内面の再活性化

慎之介の故郷への帰郷は、彼の内面に大きな心理的变化をもたらすこととなった。13年間封印していたあかねへの感情が、再会をきっかけに再燃し始めたのである。東京での挫折と疲弊に覆われていた彼の心に、かつて抱いていた純粋な愛情が蘇ってきた。

また、成長したあおいの姿を通じて、慎之介は自分自身の変化を客観視することになった。かつて音楽への情熱に燃えていた自分と、現在の現実妥協している自分との対比を、あおいの純粋な夢への憧れを見ることで痛感したのである。あおいの中に、失われた自分の一部を見出すような感覚を覚えていたのかもしれない。

そして最も重要なのは、故郷の空気の中で、かつての「しんの」としての感情が復活したことである。東京での複雑な現実から離れ、あかねやあおいと過ごす時間の中で、慎之介は13年前の純粋で希望に満ちた青年としての感情を取り戻していく。この感情の復活は、彼が本当に大切にしたいものが何かを再認識する契機となり、人生の選択を見直すきっかけを与えたのである。

ここでしんのと慎之介の対話を入れる。

→慎之介との再会そして、「しんの」との出現であおい・あかね・慎之介三者の三つの時間軸の統合されていく。

- 過去（13年前の恋人関係）
- 現在（疲弊した都市生活者）
- 未来（新たな関係性への可能性）

慎之介との再会、そして「しんの」の出現によって、あおい・あかね・慎之介三者を取り巻く三つの時間軸が統合されていくこととなる。

まず過去の時間軸として、13年前のあかねと慎之介の恋人関係が蘇る。二人が共に抱いていた東京での夢、純粋な愛情、そして突然の別れによって断ち切られた関係性が、記憶の中から呼び起こされる。「しんの」の存在は、まさにこの過去の時間軸を象徴的に体現している。

現在の時間軸では、疲弊した都市生活者としての慎之介の現実が浮き彫りになる。音楽業界での挫折、理想と現実のギャップ、そして故郷を離れて築いた新しい生活の重み。一方で、あかねは地域に根差した安定した生活を送っているように見えるが、その内面にはどこことなく空虚感を感じていたのではないだろうか。自分の夢を諦め、あおいのために生きてきた13年間の中で、失われた自分自身への渴望が蓄積されていたのである。そしてあおいは、あかねへのきょうだいトラウマやエディプスコンプレックスといった抑圧してきた感情による息苦しさを秩父という土地に投影し、将来に何も考えられず、ただその場所から逃げ出したいとしか考えられない状況に陥っている。

そして未来の時間軸として、新たな関係性への可能性が示される。過去の清算と現在の受容を経て、三人それぞれが新しい段階へと向かう道筋が見えてくる。慎之介の帰郷は単なる過去への回帰ではなく、あかねとの関係の再構築、そしてあおいの成長を促す触媒として機能し、三人が共に歩む未来への扉を開くのである。

V. 三者それぞれの「再生」の物語

1) 慎之介の再生：分裂した自己の統合

慎之介にとって故郷への帰郷と「しんの」との対話は、長年分裂していた自己を統合する重要な機会となった。慎之介は東京での挫折体験から、若き日の純粋な思い、自分らしく生きることを否認し、現実妥協してプロ意識を持つことでどうにか折り合いをつけていたのである。しかし、「しんの」と向き合うことで、抑圧されてきた自分の思いが強まることとなった。

その純粋な思いとは、何よりもあかねへの愛情であった。東京でてっぺんを取るという夢は、単なる成功願望ではなく、あかねと一緒に上昇し、幸せな生活を送りたいという願いの

現れだったのである。慎之介は有名アーティストのバックミュージシャンとして、それなりのステータスは築くことができたが、彼が出した唯一のシングル「空の青さを知る人よ」は、ある意味あかねへのオマージュであり、あかねへの思いを断ち切れなかったからこそ、この作品しかリリースできなかったのかもしれない。あかねの喪失感が受け入れられず、ぽっかりと空虚感を抱きながら日々の生活を送ってきたのである。

「しんの」との対峙は、慎之介が自分の原点に向き合うきっかけとなった一方で、もうその時は戻らないという現実も受け入れることとなった。喪失を受け入れる中で、ボウルビィの喪の作業における④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）に至り、失われた過去への執着から解放されながらも、新たな自分の生き方を模索し、あかねとの関係を再構築していく道筋を見出すことができたのである。

この変化により、慎之介は単なる過去への回帰ではなく、統合された自己として未来に向かって歩いていくことが可能となった。

2) あかねの再生：保護者から女性への回帰

（「しんの」とあかねの対話挿入）

慎之介の帰郷は、あかねにとって13年間背負い続けてきた母性的役割からの解放の契機となった。両親の死後、あかねは「母親代わり」として葵を育て上げる重責を一身に担ってきたが、この長期間にわたる保護者としての立場は、彼女自身の女性としてのアイデンティティを抑圧し続けていた。慎之介との再会は、この重圧から解放される可能性を示すものであった。

また、慎之介との関係を通じて、あかねは一人の女性としての感情を再発見することとなる。13年間封印してきた恋愛感情、女性としての欲求、そして自分自身の幸せを追求したいという気持ちが、徐々に蘇ってきたのである。葵の養育という責任に埋没していた彼女にとって、これは久しく忘れていた自分自身との再会でもあった。

さらに重要なのは、恋愛感情を抱くことへの罪悪感の解消である。あかねは長い間、自分が幸せになることは葵を裏切ることだと感じ、自分の感情を抑制してきた。しかし、葵の成長と「しんの」を通じた葵自身の感情的な成熟を目の当たりにすることで、母親としての役割の荷が下りたことを実感した。同時に、矛盾した言い方ではあるが、あおいをライバルとして捉えることで、安心してエディプス的な三角関係に向き合うことができるようになった。また、あおいとの関係においても、これまで抑圧されていたきょうだいとしての競争心や嫉妬心といったきょうだいトラウマが表面化し、それらの感情を受け入れることで、より

健全な姉妹関係を築く基盤が形成された。これにより、あかね自身も一人の女性として愛し愛されることへの権利を受け入れることができるようになったのである。この心理的变化は、あかねが真の意味で自立した大人の女性として再生するための重要な過程であった。

（「しんの」とあかねの対話挿入）

3）あおいの再生：依存から自立への成長

（あかねのしおりや日記のシーンを取り上げる）

あおいにとって「しんの」との出会いと別れは、長年抱えてきたきょうだいトラウマを克服し、エディプスコンプレックスに向き合う重要な契機となった。まず、あおいはあかねとの健全な競争関係を受容することができるようになった。これまで抑圧してきたあかねへの対抗心や嫉妬心を、「しんの」への感情を通じて安全に表現し、処理することで、姉との関係において競争することは決して悪いことではないという理解に至ったのである。

また、あおいはきょうだいコンプレックスからくる排除される恐怖からの解放を経験することとなった。長い間、あかねから愛情を失うことへの不安に支配されていたあおいだったが、「しんの」との関係を通じて自分自身の感情と真摯に向き合い、慎之介への想いを整理することで、あかねとの関係において自分なりの立ち位置を見出すことができた。この過程で、あおいは自分がいることであかねの幸せを妨げているという罪悪感からも解放されたのである。

さらに、あおいは感謝と自立の両立という最も複雑な課題を達成することができた。これまであおいは、あかねの存在の大きさを感じる一方で、あかねへの劣等感も抱えており、さらに自分があかねを束縛してきたという罪悪感から素直に感謝の気持ちを表出することができずにいた。様々な感情が入り組む中で鬱積した思いを抱え、秩父の土地から逃げ出したいと感じてきたのである。

しかし、「しんの」との関わりで自分の感情に向き合い、エディプスコンプレックスを受け入れることで、重要な心理的变化が生じた。クライン派的に言えば、自立という喪失を目の前にして妄想分裂ポジションにあったあおいが、抑うつポジションへと移行したのである。あおいはあかねとの分離を受け入れ、慎之介と自分が恋仲になることを断念し、あかねが慎之介と愛し合うことを受け入れることができた。この過程を経て、改めてあかねへの純粋な感謝の思いが湧き上がってきたのである。この理解により、あおいは真の意味での心理

的自立を果たすことができたのである。

VI. まとめと「井の中の蛙」の多層的解釈

「井の中の蛙」から見る成長の物語

本作品における「井の中の蛙大海を知らず。されど空の青さを知る」というテーマは、「空の青さを知る」きっかけとしての高校時代の「しんの」の出現を軸に、単なる個人の成長を超えた関係性の成熟と再生の物語として理解することができる。

あおいとあかねは深い愛情で結ばれ、両親が亡くなっても、その不自由さを感じさせることなく生活が続けることができた。しかし一方で、その生活の中で抑圧してきたものもある。それがきょうだいトラウマであり、「しんの」をめぐるあおい、あかね、しんののエディプスコンプレックスであった。

具体的には、あおいは幼いが故に「しんの」とあかねの仲を引き裂こうとしてきたことへの罪責感、そして本当はあおい自身が「しんの」のことを好きであったがその思いを叶えられなかった複雑な感情を抱いていた。同時に、あかねはそのまっすぐな思い（それが「空の青さ」なのだろう）をもったあおいの心に憧れを抱き、一方であおいは自分の思いを抑えながら、うまく周囲の人々と調和し、交流しているあかねへの羨ましさを感じていた。この相互憧憬こそが、きょうだいトラウマの複雑さを物語っている。

あおいが成長するにつれ、これらの感情が抑えきれなくなり、あかねとの関係を井戸のように息苦しいと感じ、それを秩父の土地に投影するようになったのである。慎之介の帰郷により、これまで止まっていた時間が動き出し、このような状況の中での若き日の「しんの」の出現は、これまで抑圧してきたきょうだいトラウマやエディプスコンプレックスに向き合うきっかけとなったのである。

「しんの」とあおいが交流することで、あおいは幼き日に感じていた「しんの」とのロマンティックな感情を持ちながらも、その思いを断念するというエディプスコンプレックスを受け入れることができた。それゆえに、刹那的に「今いる場所から逃げ出そう」と上京してバンドで天下を取るという荒唐無稽な願望を捨て、エンディングで描かれたように現実的な進学を考えるようになったのである。

VI. おわりに

この物語が示しているのは、姉妹がそれぞれの「井戸」の中で培った真の価値である「空の青さ」を再発見しながら、「大海」へと向かうということである。あおいはあかねとの絆の深さと音楽への愛を、あかねは13年間の献身的な愛情と人間的成熟を、それぞれの「空の青さ」として見出していく。

これは単なる個人の成長物語ではなく、姉妹の関係性そのものが成熟し、再生していく物語として読み解くことができる。きょうだいトラウマやエディプスコンプレックスといった心理的課題を乗り越えながら、それぞれが「井戸」の中で培った価値を統合し、より豊かな関係性を築いていく過程が描かれているのである。